貿易論序説

本山美彦著

有斐閣
経済学叢書
4

著者紹介

もと　やま　よし　ひこ
本　山　美　彦

1943年神戸市に生まれる。
1965年京都大学経済学部卒業。
1969年京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。
甲南大学経済学部助手，講師，助教授を経て，
現　在　京都大学経済学部助教授。
主　著
『世界経済論——複合性理解の試み』同文館，1976年。
『世界経済論を学ぶ』（共編）有斐閣選書，1980年。
『南北問題をみる眼』（共著）有斐閣新書，1980年。
D．ウィンチ『古典派政治経済学と植民地』（共訳）未来社，1975年。
F．ヒルガート『工業化の世界史——1870～1940年までの世界経済の動態』（共訳）ミネルヴァ書房，1979年。

貿易論序説　〈有斐閣経済学叢書〉

1982年10月20日　初版第1刷印刷
1982年10月30日　初版第1刷発行

定価 3,200円

著者　本山美彦
発行者　江草忠允

発行所　株式会社　有斐閣
〒101　東京都千代田区神田神保町2-17
電話（03）264-1311　振替 東京 6-370
京都支店〔606〕左京区田中門前町 44

印刷　中村印刷株式会社　製本　新日本製本株式会社

© 1982，本山美彦．Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-06385-0

はしがき

「あらゆる解放は，人間の世界を，諸関係を，人間そのものへ復帰させることである」（『ユダヤ人問題』，『マルクス・エンゲルス全集』第1巻，407ページ）。

私の短い研究史を顧りみても，現代のマルクス主義的著作の多くは，学問への情熱よりもむしろ懐疑を私に植えつけてきたように思える。そのために私は，隣の青い芝生の中に入りきることをどれほど夢想してきたことか。この決意がつかなかったのは，ただひとえにマルクスのこの言葉の存在のゆえであった。研究上の直覚から言えば，マルクス的経済学よりも非マルクス的経済学の方がはるかに具体的領域を拡げる可能性をもっている。

しかし，そこに飛び込めなかったのは，非マルクス的経済学の非人文的要素になじめなかったからである。あるいは，いとも簡単にマルクスを軽蔑してしまうその姿勢に単純に反発したためなのかもしれない。そのたびに，私はマルクスのこの言葉をつぶやいていた。それにもかかわらず，多くのマルクス主義者の著作は私に心の平安をもたらすものではなかった。そしてこのような心の屈折はいまでは，科学性という用語にすら生理的嫌悪感を覚えさせるほど増幅してしまっている。とくとくとしたり顔で語られる科学の名において人格が否定されてきたあまりにも悲しいできごとをこれまで幾度も見聞し，自らも経験したからでもある。確かに，人間の非人間的支配の根拠は，すべて客観的なもののうちに横たわる法則の無知からきている。したがって，「人間が人間の意識的主人公」になるための客観的・科学的認識に到達する営為の中に学問のすべての目標が注ぎ込まれたことは当然であろう。

しかし，錯覚はここから生じた。人間にとって最も重要で崇高な自由という理念が，人間的に成熟していないイデオローグによって規定されてしまったのである。マルクスの名において，あるいは客観的科学の名において，どれほど多くの自由がいまなお圧殺させられているだろうか。自由の規定は多数ある。しかし，そのうちのただ一つの規定によって「すべてを集約せしめうるような

人間の前提をもってしては，人間の解放もしょせん抽象たるをまぬがれず，そのことがやがてまたそこからはみ出た人間性への不当な圧迫に転化するのである」（梅本克己「人間的自由の限界」，『著作集』第1巻，13ページ）という批判を私はいまなお素晴らしいと思っている。科学の名において語られる経済学においては，「すべてを説明しうるという前提と，すでに説明しえられている領域との区別」が「明瞭に自覚され」るケースがあまりにも少なかったからである（同ページ）。

周知のように，1970年代は，これまでの価値観なり幻想がことごとく瓦解していく過程であった。それとともに経済学上のペシミズムが燎原の火のごとく若い人々の感性の中に入り込んでしまった。私はこのことを，人文性を失って，急速に自然科学性を主張するようになった経済学に対する痛ましい抗議として受け止めている。ところが，このペシミズムの中から湧き出てきたのは，人間的自由なるものへの深い洞察を欠いた体制拝跪（はいき）主義者たちの低俗な揶揄（やゆ）であった。現在の私がなお経済学にしがみついているのは，この揶揄に対する抵抗意識のせいなのかもしれない。

経済学はいまなにをすればよいのか。そして自分はいまなにをしているのか。研究者というものになって以来すでに多くの歳月をおくりながら，私などはなおまよいと焦りからの脱却をはたしえないでいる。それでも，冒頭のマルクスの言葉だけは私の心をしっかりととらえて離さない。そしていまでは，この言葉からしか私自身の生き延び方は出てこないし，経済学の再生もありえないという思い込みができるようになった。この心境に達したこと自体が現代の歴史的所産なのだと思い切ることによって，私は再び研究の情熱をかき立てようとしている。「おのがじしの時代において，歴史としての現代のただなかに有限の生をつねに生きている当人，ないしは歴史的個性を有する当該社会にとっては，自分の属しているそのかけがえのない時代」（いいだもも『現代社会主義再考（上）』11ページ）を自ら語ればよい，という境地に私はやっと立つことができた。

本書は，研究につきまとう危機を克服すべく，それこそ必死の思いで書いたものである。それは，なによりも私の心そのものに言いきかせる作業であった。それにもかかわらず，本書が私的効用から公的効用に転化できたかというとき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わめて心もとない。なるべく私的情緒を殺しながら叙述したが，1人でも2人でもよい，本書の問題を真剣に受け止めてくれる読者をもちたいと痛切に願っている。それでも，この作業の中で人間的自由，民主主義という言葉の重みをやっと実感をもって理解するようになれたことだけは確かである。私自身はこの作業で経済学の1つのありかを見出そうとした。

本書は12の章から成っている。経済学上のペシミズムが蔓延(まんえん)している今日の状況にある種の共感を覚えつつも，第1章は変革主体形成に関するマルクスの発想の再確認から始めている。いまさらマルクスの再確認でもあるまいという批判は覚悟のうえで，すべての修正を受け入れたのちにも，なお最後に残るマルクスの理念の意味を再確認することによってでしか，これからの経済学の構築はありえないという自覚にこの作業は基づいている。とくに，今日の私たちに巨大な影響力を与えた従属理論が主観的意図にもかかわらず，あまりにも人間的自由に関する理論的歯止めの省察と用意を欠いたものであることに不安を感じるからでもある。マルクスの理論はなにゆえに構成的歴史の叙述でなければならなかったのか，このことの意味を問う作業の中で，純粋資本主義の極北に構築しようとする世界経済論の方法に対する反省をも併せて出している。しかし，完全に構成的叙述などやりおおせるものではない。必ずそこには理論上の無理が生じる。このために，理論的演繹は現実に出会う窓口を開けておく必要がある。これを本書では体系の留保という言葉で表現したが，マルクスにおける世界市場理解にはこのことの意味がよく示されているように思える。これが第2章のテーマである。

第3章では，世界市場部面における異質性の態様とその定義が与えられている。それとともに『資本論』第20章「労賃の国民的相違」に関する新しい解釈を提示した。そこでは，価値形成に参加する労働の態様が一国内と世界市場とでは決定的に異なること，すなわち，一国内では捨てられる強度の劣った労働でも世界市場では価値を形成しうることが指摘されていたのである。これは，労働力の再生産の差異に基づくものである。本書では，この視点を基本的なものに置いている。これまでのわが国で発展させられてきた国際価値論の行ってきたような国民的価値の換算という論点も，労働力再生産費との関連性を重視しなければ無意味であることがこの章では論じられる。

第4章では，低賃金労働力の再生産構造が明示される。近年注目されるようになった articulation 論の利用がそこでは目指されている。植民地的宗主国の重しを失った第三世界の下部構造の不安定さと遊休労働力の排出圧力とを，NICs 的発展の関連のもとで考察する意図に基づく作業がこの章の課題である。そのうえで支配一従属構造という「連続性の中の変化」(本多健吉氏の用語)という局面が重視される。

第5章では低賃金労働力が農業生産力の低さの帰結であるとの仮説が示されると同時に，貿易取引きに流れ込む財の性質の差異を重視すべきことが説かれる。考えてみれば，マルクス的経済学はこれまであまりにも貿易のもつ素材的転換の視点を欠落させすぎたと言える。財の効用という側面にこだわりすぎることは，経済学を俗流化させる危険性を多分にもつものの，この視点のある程度の復活は，これまでの欠落を埋めるためにも必要なことであろう。

農業の低生産性が低賃金のもっとも大きな理由であるという認識に立って，この事情から第三世界の交易条件の悪化が生み出されるという考え方はすでにW. A. ルイスにもあったし，財の性質の差異がもつ交易条件への影響についてもR. プレビッシュによって論じられていた。この2つの理論の検討を通じて，彼らの理論が従属理論との意外なほど大きな親近性をみせることの確認が第6章ではなされる。この章では工業部門の生産性における先進国・後進国間格差よりも，農業部門における方が大きいことも論点として提起されている。

この論点に基づいて第7章で，これまでの国際価値論で使用された数値のもつ限定的意味が吟味される。理論のもつ射程距離という側面もここでは意識されている。第8章も同じく，国際価値論の反省を行いつつ，国民的価値の換算方法，および「構成要素の加算」論的弊害からの脱却方法とが模索される。第9章は，価値論の次元にこだわってきたこれまでの国際価値論が無意識のうちに生産価格論の次元をとり込んできた事実の指摘から，生産価格論的国際価値論の構築の必要性が自覚され，第10章はこの面におけるA. エマニュエル，C. パロワ，O. ブラウンなどの先行業績を検討している。とくに，O. ブラウンのスラッファ型生産関数の利用については高い評価を与えている。

次の第11章では，世界市場の型を重視すべきことがF. ヒルガートの業績紹介の形をとって主張される。パックス・ブリタニカ型世界市場とパックス・ア

メリカ型のそれとが対比され，今日では後者の型が前者の型に近づきつつあるのではないかとの予兆が説明されている。そのうえで，近年ますます顕著になってきた Intra・Industry Trade（部門内貿易）の実態とその局面にかかわる若干の理論家たちの説が紹介され，今日の貿易摩擦論議とのかかわりが問題にされる。

最後の第12章は，これまでの抽象的理論次元からは大きくはみ出している。それまでは，注意して理論的叙述を歴史的記述で代位したり，安易な現状分析を行うことを戒めてきたが，ここで現代に対する本書の問題意識を明確にするために設定されたものである。そこでは，第11章までにとってきた「支配―従属」論的視点から NICs 的発展への注視に視点を移している。さらに貿易摩擦論議の視点も明示される。

本書の題名を『貿易論序説』にしたのは，一刻も早く現代貿易の諸相に迫りたいという私の願望がこめられている。しかし，そこにたどりつくまでに，まだまだ整理しておかねばならぬ経済学上の難問が多すぎる。本書は低賃金労働力が世界経済に包摂されている態様を理解するための理論的視点を設定するところに狙いを限定してしまった。近い将来，現代貿易そのものを論じる，というのが私のもっとも大きな望みである。

本書執筆の過程で多くの人びとの励ましを受けた。私が奉職している京都大学経済学部の諸先生方の自省的でしかもなによりも研究の自由を尊ぶ姿勢から私はじつに貴重な恩恵を受けている。それに，京大のライブラリアンの図書に対する情熱はつねに私を鼓舞してくれたものである。とくに松田博氏には感謝したい。大学院学生の桜井公人氏にもひとかたならぬお世話になった。

有斐閣京都支店の岡村孝雄氏には万感の思いで感謝の心を伝えたい。この仕事の機会を与えて下さったことはもちろんだが，約束の期限に1年以上も遅れ，しかもやっと提出した原稿を私の要請を入れて返して下さり，その修正にまた6カ月もの時間をとってしまった私のわがままと不手際を我慢して下さった。おそらく有斐閣のすべてのスタッフの方々に，多大の御迷惑をおかけしたことであろう。誠に申訳けなく思っている。

1982年5月31日

須磨にて　　本山　美彦

目　次

はしがき

第1章　歴史意識の危機と経済学 …… 1

1　歴史に倦む傾向 …… 1

1.1　経済学におけるペシミズム …… 1

1.2　歴史的進歩に対する実感喪失 …… 2

2　規範性の喪失と経済学 …… 5

2.1　歴史意識そのものの否定例 …… 5

2.2　経済学のミニ・システム化 …… 7

2.3　西欧中心史観の拒否 …… 8

3　経済学における新たな困難 …… 11

3.1　非マルクス的経済学の場合 …… 11

3.2　マルクス的経済学の場合 …… 13

4　マルクスにおける歴史意識 …… 15

4.1　自由な社会的個人 …… 15

4.2　マルクスにおける構成的歴史 …… 18

4.3　限界のあった「資本の文明化作用」 …… 21

第2章　マルクスと世界市場 …… 25

1　Gliederung（諸分肢）への着目 …… 25

1.1　アルチュセールの審級 …… 25

1.2　バリバールの位階編成 …… 27

2　マルクスの「叙述プラン」の性格 …… 28

2.1　平板な上向主義の反省 …… 28

2.2　「序説プラン」と「貨幣章プラン」 …… 31

2.3 「資本章プラン」 ……33

3 「プラン」における世界市場……36

3.1 「資本一般」とその外部 ……36

3.2 「外側に向かっての国家」 ……38

3.3 体系に沿う上向と留保 ……41

4 「可能的克服」の場＝世界市場 ……43

4.1 「資本一般」の世界市場 ……43

4.2 「自然時間」と「資本時間」 ……46

4.3 原料の制限 ……49

第3章 複合的世界市場と世界労働——53

1 複合性理解と経済学 ……53

1.1 複合性とは ……53

1.2 理論の糸口 ……55

2 複合性のもたらす出稼ぎ型労働力 ……57

2.1 異質性理解に対する批判 ……57

2.2 農業の異質性と出稼ぎ型労働力 ……59

3 労働力の再生産費と国際価値 ……62

3.1 賃金水準の不平等 ……62

3.2 『資本論』の「労賃の国民的相違」 ……64

4 価値論からみた国内市場と世界市場 ……67

4.1 中位の労働強度 ……67

4.2 「労働時間の長さによる秤量」の変更 ……69

4.3 世界的労働編成論 ……72

第4章 周辺部構成体と労働力の再生産——75

1 価値換算論の克服 ……75

1.1 「構成要素の加算」論的誤り ……75

1.2 労働の強度と低賃金 ……77

2　低賃金構造の再生産と articulation ……80
2.1　近代ブルジョア国家の articulation ……80
2.2　国独資国家の articulation ……82
2.3　多ウクラード的国家の articulation ……85
3　従属理論の地平 ……89
3.1　フランク・テーゼ ……89
3.2　アミン・テーゼ ……92
3.3　デュプレとレーのテーゼ ……95
3.4　放置された労働力の再生産 ……99

第5章　農工間国際分業と低賃金労働力 ―― 103
1　財の特性と国際分業 ……103
1.1　経済学における効用 ……103
1.2　素材転換としての外国貿易 ……106
1.3　消費財の区分 ……110
2　需要面からみた農工間格差 ……115
2.1　農業における需給の硬直性 ……115
2.2　工業の有利性 ……118
2.3　就業構造の変化と垂直分業 ……122
3　農業生産力と賃金水準 ……125
3.1　経済政策的国家 ……125
3.2　賃金水準の格差をもたらすもの ……127

第6章　交易条件論 ―― 131
1　W. A. ルイスのモデル ……131
1.1　ルイスの国際価値論 ……131
1.2　移民の経済的格差 ……133
1.3　ルイスの開放モデル ……137
2　外向的発展の陥し穴 ……139

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2.1 ルイスの権力基盤論 …… 139
2.2 輸入代替か輸出代替か …… 141
3 R.プレビッシュの交易条件論 …… 146
3.1 財による所得分配の不平等 …… 146
3.2 生産性上昇格差と周辺部 …… 148
4 農業生産性の格差 …… 149
4.1 ルイスの問題提起 …… 149
4.2 生産性と新製品 …… 151
4.3 農業生産性格差のとらえ方 …… 154

第7章 国際価値論の反省 —— 159
1 モデル内の数値 …… 159
1.1 水平貿易と垂直貿易 …… 159
1.2 数値の含意 …… 162
2 国際価値論の射程距離 …… 164
2.1 数値の限定 …… 164
2.2 リカードウとの対比 …… 167
3 隠れた産出量線 …… 173
3.1 2国2財の意味 …… 173
3.2 比較生産費説との対比 …… 176
3.3 静態性克服の方向 …… 180

第8章 貿易利潤論 —— 185
1 貿易利潤の源泉 …… 185
1.1 技術係数の固定 …… 185
1.2 輸出超過利潤 …… 190
1.3 輸入利潤 …… 192
2 国民的価値の換算 …… 196

2.1 換算の視点 …… 196
2.2 名和統一氏の試み …… 199
2.3 名和統一氏の視点の継承 …… 203
2.4 吉村正晴氏の試み …… 207

第9章 国際価値論と均衡化過程 …… 211
1 リカードウ貿易論の再発見 …… 211
1.1 リカードウの問題 …… 211
1.2 賃金財，収穫逓減，貿易利潤 …… 215
2 調整プロセスと貿易利潤 …… 219
2.1 3部門モデル …… 219
2.2 限定条件の緩和 …… 222
2.3 生産性上昇の波及効果 …… 226
2.4 柴田固弘氏の3段階論 …… 229

第10章 不等価交換論と生産価格論 …… 235
1 比較優位の逆転 …… 235
1.1 農業生産性格差を重視したケース …… 235
1.2 工業製品の比較優位と後進国 …… 238
1.3 標準財のケース …… 241
1.4 新製品のケース …… 245
2 交易条件論と不等価交換論 …… 247
2.1 一般的利潤率と生産価格 …… 247
2.2 エマニュエルの不等価交換論 …… 249
2.3 パロワの不等価交換論 …… 254
2.4 ブラウンのスラッファ型モデル …… 259

第11章 世界市場の型 …… 263
1 貿易のネット・ワーク …… 263

1.1 量化の試み …… *263*

1.2 F. ヒルガートの業績——ヨーロッパの貿易 …… *266*

1.3 パックス・ブリタニカの型 …… *272*

2 多角的貿易の発展史 …… *276*

2.1 基本要因としての資本輸出 …… *276*

2.2 型の崩壊 …… *280*

2.3 多角的貿易の意味 …… *284*

2.4 現代との接点 …… *287*

3 部門内分業 (Intra・Industry Trade) の進展 …… *291*

3.1 パックス・ブリタニカとパックス・アメリカーナ …… *291*

3.2 部門内分業論の先行者たち …… *294*

3.3 部門内分業の現状——貿易摩擦の根拠 …… *298*

第*12*章 相互依存下の国際経済 —— *303*

1 NICs と相互依存性 …… *303*

1.1 「資本の文明化作用」は進展しはじめたのか …… *303*

1.2 第三世界の工業化 …… *306*

1.3 貿易にみる相互依存性 …… *309*

2 NICs の製品輸出と外資系企業 …… *313*

2.1 外資系企業の比重 …… *313*

2.2 多国籍企業戦略の4段階 …… *318*

3 北側における就業構造の変化 …… *322*

3.1 第2次産業部門の低下 …… *322*

3.2 第三世界の低賃金労働力による北側労働力の代替 …… *326*

4 NIEO (新国際経済秩序) の現実 …… *329*

4.1 NICs 型工業化の後方連関効果 …… *329*

4.2 遊休労働力の圧力と NICs 型経済 …… *333*

5 貿易摩擦論議の視点 …… *338*

5.1 ASEAN (東南アジア諸国連合) のダイナミズムと日本 …… *338*

5.2　企業内国際分業と国際政治の危機 …… *341*

5.3　集団的もたれあいの世界市場 …… *345*

参考文献 —— *349*

あとがき —— *365*

索　引 —— *367*

事項索引 —— *367*

人名索引 —— *372*

第1章　歴史意識の危機と経済学

私は楽天主義者である。私は人生を肯定する。なぜなら，崩壊する太陽と崩壊する宇宙の命運がどのようなものであろうとも，私は人類の生存に進歩と進化があると信じるからである。――アインシュタイン

1　歴史に倦む傾向

1.1　経済学におけるペシミズム

経済学上のペシミズムが広がりつつある。もちろんこれは，単細胞的頑迷な立場からいたずらに嘆いておれば済む問題ではない。それは，第三世界の世界史的表舞台への登場が，現象面のみならず人々の心の中に深い衝撃を与えていることの反映だからである。旧来の経済学はともすれば，西欧社会を人類史の到達点とする立場から，市場メカニズム，資本制的原理にそぐわない要素を遅れた不合理なものとして容赦なく切り捨ててきた。歴史理論としても経済学は西欧の高みから，残余の社会を発展段階別に整序し，各国史を西欧の歴史的諸段階になぞらえてきた。その範囲にそぐわないものについては，せいぜい典型的型のヴァリアントとしてしか扱ってこなかったのである。

しかし，各民族の各社会には固有の編成原理があり，それぞれの文化的伝統のもとに，各民族史は多様で複線的な発展コースをたどらざるをえない。それらはけっして，西欧型の軌道を歩んだわけではないし，歩めるはずもなかった[1]。第三世界の意義を知ろうとするには，従来の単線的歴史観を否定し，経済決定

1)　この歴史観の先鞭は，わが国においては宇野弘蔵氏によってつけられたと思われる（宇野，〔287〕）。同書のもつ歴史的意義については，本山美彦，〔184〕，27-28ページ，参照。

論から脱して，文化史的・社会史的要素をもっと大幅に取り入れた歴史観を確立するか，各国史を包含した世界的規模の社会史を樹立しなければならない，というのが近年の大きな思潮である。そうした歴史認識によってのみ，西欧型市民社会の編成原理が周辺地域の「脱蓄積」(de-accumulation)[2]を不断に産出する態様を描き出すことができるであろう，というのである。たとえば，「緑の革命」にしても，工業化戦略にしても，西欧型社会には適合するが，第三世界には適合しない技術を後者に押しつけることによって，この社会をズタズタに引き裂いてしまったのではないのか。こうした世界経済の政策に対しての告発と，結果的にはこれを擁護した旧来の経済学の枠組みを解体する作業が今日大きなうねりとなって私たちを取り込んでいる。

第三世界の歴史への登場を予見し，それを包摂しうるには，現今の世界経済の枠組みのみでは欠陥がありすぎるという見解は，すでに第2次世界大戦中の国際連盟の良心的実証研究によって打ち出されてはいた[3]。しかしながら，1970年代以前の低開発理論はプレビッシュ理論を別格とすれば，計画経済原理か市場原理か，均斉成長経路か不均斉成長経路か，外国貿易依存型か国内市場依存型か，といった開発戦略が云々されたにとどまり，経済学の枠組みへの問い直しはついになされずじまいだったのである。

体制を問わず，先進国の理念とされていたものが腐食しはじめた1970年代のまさにそのときに，第三世界がグループとしての結束を実現させたこと，しかし，結束しえた力のもっていく方向を見定めがたくなっていること，この新しい歴史的状況こそが，今日の第三世界論と，それに共感する経済学に大きな動揺を与えるようになったのである。そして，経済学は旧い殻の脱皮をせまられている。

1.2 歴史的進歩に対する実感喪失

この種のペシミズムは，なにも経済学という狭い領域に限定されるものではない。今日の私たちを取り巻く大状況そのものが，進歩に対する実感喪失から成り立っていると言ってもよい。しかし，経済学のように感性を重視すること

2) Frank, A. G., 〔64〕, の吾郷健二，訳者まえがき。
3) Hilgerdt, F., 〔85〕.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com